

学生企画のボランティア活動は、住友商事・東日本再成ユース
チャレンジプログラムから助成を受けています。

ボラスステ新聞

2015年度
第8号 vol.2

二〇一五年
十二月二四日
発行

(続)神戸招聘プログラム

学び、考え、親交が深まった三日間

三日目は、講師の方をお呼びしてワークショップを行いました。講師の方から防災や災害時の被災地での動きについてお話を聴き、とても勉強になりました。始めに、「聞きだす力」とは、被災者の方との会話から、いかに被災者のニーズを聞きだすことができるか、求められる力です。実際に、一対一のインタビュー形式で自由に質問しあいました。抽象的な質問をすると、質問の意図が相手に伝わらず、欲しい答えがもらえないということがありました。いかに相手に答えやすい質問ができるか考えるのが難しかったです。

次に、「情報を素早くかつ正確

に伝えること重要性」についてお聞きしました。災害時には電気が来なくなり、情報を入手しづらくなる場合があります。情報が入りにくい状況でいかに素早くかつ正確な情報を入手、伝達できるかが生死を分ける場合があるのです。これを鍛えるために、ボランティアを題材とした俳句を作り発表をしました。一時間の昼休みの間に季語を入れて俳句を考えましたが五七五の形にするのに苦労しました。昼休み後は、グループごとに意見交換をしました。災害について「普段できること」、「災害が起きた直後」、「避難時」、「避難所での生活」、「復興時」にどのようなことをしたらよいかについて話し合いました。私のグ

ループでは「避難所での生活では、衛生面の管理を担当する人を決める」という意見ができました。今まで考えたことがなかった意見が出て、とても内容の濃い時間を過ごすことができたと思います。

その他にも、「サービスマーケティング」について学びました。これは、自分が大学で学んでいることを、どのようにボランティアへ活かせるか、ということです。例えば、人間心理学科の学生であれば、カウンセリングをサポートすることができます。また、健康栄養学科の学生であれば、健康的な献立を考え、料理を振舞うことができます。このように、自分の専門分野をボランティアに活かせること知り、これからの活動に取り入れていくらと思えました。

招聘プログラムに参加して、



現地で直接学ぶことは、テレビといったメディアから間接的に学ぶよりも、はるかに情報量が多いと感じました。阪神・淡路大震災について今まで知らなかったことも多くありましたし、東日本大震災について、直接、宮城県に来ていただき、被害の大きさや復興状況についてなどを知ってほしいと思いました。

また、ボランティアを行って

いる他大学の学生と多く交流することができたので、このつながりを絶やさずにこれからも交流を続けていきたいです。

(人間心理学科二年 沼田誠史)



編集 後記

2015年最後のボラスステ新聞。今年だけでも8号分発行することができ、大変嬉しく思います。記事を書いてくださった皆さん、ご協力ありがとうございました。また、この編集後記が好評だとお聞きし、毎回考えるのが大変でし……いいえ、楽しかったです(^ ^)。今年も残すところあと7日。近々、大掃除をしなくては。それでは良いお年をお迎えください！(表現文化学科3年 渋谷佳代)